

書

矢田俊文編著：

地域構造の理論

ミネルヴァ書房，1990年，272頁，2,700円

地域をどうとらえるかという問題は地理学を研究するものにとって大きな問題である。この地理学における普遍的な課題に経済地理学の分野から示唆に富む貴重な研究がまとめられた。それが表記の著書である。

編著者の矢田はこれまで経済地理学の理論に関して多くの著作を手掛けられている。1975年に「地域構造論」の具体化をみて以来(野原敏雄・森滝建一郎編著『戦後日本資本主義の地域構造』沙文社，7～41ページ)，その理論の精緻化に努め，その成果は1982年に体系化されている(『産業配置と地域構造』大明堂)。

今回の著書は「はしがき」にもあるようにそれ以後の矢田研究成果と彼のもとに集まった若手研究者たちの共同研究の戦果の公表である。と同時に，地域構造論の経済学的位置付けを試み，その発展方向を示したものである。本書は22の章からなっており，それらを6編にまとめている。その構成は次のようになっている。

第I編「地域構造論序説」

- 第1章「地域構造論学説史」(加藤和暢)
- 第2章「地域構造論概説」(矢田俊文)
- 第3章「地域構造論論争」(矢田俊文)
- 第4章「地域構造論と構造アプローチ」(松橋公治)
- 第5章「地域構造論と企業の地理学」(富樫幸一)

第II編「産業構造と地域構造」

- 第6章「経済発展と産業構造」(松井隆幸)
- 第7章「経済発展と地域構造」(柳井雅人)

第III編「産業配置と地域構造」

- 第8章「中心地理論と都市形成」(鈴木洋太郎)
- 第9章「工業立地論と工業地帯」(山崎朗)
- 第10章「集積論と「極」の形成」(柳井雅人)
- 第11章「中枢管理機能の立地と都市システム」(松原宏)
- 第12章「インフラストラクチャーと外部経済」(萩野誠)

第IV編「地域構造と地域経済」

- 第13章「地域循環と地域経済」(田村均)
- 第14章「大都市圏と地帯構成」(松原宏)
- 第15章「農業地帯と過疎問題」(加藤和暢)

第V編「国土政策と地域政策」

- 第16章「国土政策の歴史的背景」(加藤和暢)
- 第17章「開発経済論と国土政策」(矢田俊文)

評

第18章「地域政策と自治体」(久野国夫)

第19章「地域政策と地域主義」(石井雄二)

第VI編「国際分業と産業配置」

第20章「国際分業と世界システム論」(津守貴之)

第21章「国際産業配置論」(鈴木洋太郎)

第22章「多国籍企業と世界都市システム」(山崎朗)

以上の編章より本書の特徴を3点に整理してみると，まず第一は地域構造論の歴史的形成過程とその発展方向の展望である。すなわち，加藤は第1章において地域構造論の起源を戦前の地政学に対する根底的批判から説き起こしており，極めて興味深い論を展開している。また，第2章では矢田が「地域構造論」を「国民経済の空間システムないし地域システムを解明する理論」として定義し，そのシステム解明にとって必要な2つの視点として「一つは，歴史的に先行する(生産力)の発展段階での地域構造論を与件として設定すること」そして，「もう一つは，…それぞれの生産力段階に対応した産業構造のなかでの，リーディング・インダストリーの配置を軸にしてマクロレベルでの産業配置を組み立てること」をあげ，既存のミクロ理論としての立地論の地域構造論への応用の可能性を示唆している。

第二に立地論(第II・III・IV編)，国際経済論をはじめとする既存の経済学理論(第I編第4・5章第VI編)の地域構造論への適用・応用の可能性を検討している点である。特に立地論とその系論の紹介には経済の史的発展段階での考察も含めて多くのページが割かれている。

第三に地域経済や地域像をめぐる諸論への批判である。1973年に矢田によって地域構造論の提起をみて以来寄せられた地域構造論批判に対する反批判(第I編第3章)，あるべき地域像をめぐる運動論への評価と批判(第V編)が試みられている。

すでに示したように本書の内容は広範にわたるとともに，それぞれの論文が地域構造論を深めるための重要な問題提起をなしており，今後，各論の発展をみ，将来「地域構造論講座」のようなシリーズの刊行に結実することを期待するのは評者の無い物ねだりだろうか。また，本書にはきめ細かな索引が整備され，全体を引き締めたものになっている。いわば，地域構造論の事典ともいうことができる。経済地理学研究者だけでなく地理教育の理場に携わっている方々にもお勧めしたい。

(小松原 尚・北海高等学校)